

窪田美穂子  
Mihoko KUBOTA

# 理由を表す接続助詞「から」の親の使用と 2～4歳児との比較

A comparative study between parents and two- to four-year-old children in terms of the use of the causal conjunctive “kara”

先行研究（窪田 2015）において、子どもの発話コーパスであるCHILDES（MacWhinney 2000；Oshima-Takane, MacWhinney, Shirai, Miyata, & Naka 1998）に基づいて記録された2名の子どものデータ（Ishii 2004, Kubota 2000, 2003, 2006）から分析した2歳から4歳までの理由を表す接続助詞「から」のうち、「従属節から＋主節」と「主節＋従属節から」の習得の結果をふまえ、本研究では、同データの親の「から」の使用の共通点と相違点を比較検討し、親の発話が言語習得に必要な情報としてどの程度子どもの言語使用に影響しているか、また、相違点があれば子どもがまだ習得できていないとみられる点は何か、を考察した。

先行研究では、子どもは二人とも2歳後半から「から」単節表現を頻繁に用い、更に「従属節から＋主節」を「主節＋従属節から」よりも頻繁に用いた。文脈や進行中の話題に関する情報（旧情報）を出した後に関連する新情報を出した場合も「従属節から＋主節」を用いることが多かった。一方、「から」単節は4歳頃までも多く、事象や状況がなぜそうなるかなど理由を示すほか、自分がしようとする行為の宣言や相手の気を引きたい意図でも使う傾向があった。しかし単・複節構造とも、相手にある行為をさせるために自身から行為や情報を提供するといった相互的目的をもつ意味（例：前提条件を示す・お膳立てする）での使用にはまだ至っていない。伊藤（1990, 2006）による習得順序とは異なり、発話する情報の新旧に関わらず「従属節から＋主節」は逆の順序よりも早く頻繁に使用されていた。「から」は節間をつなぐ接続詞のように発話計画を発話中にできるといった発話産出の柔軟さのほか、因果関係を示す理由のほかにとくに単節にみられる行為や事象の主張など非理由的・対人的意味が言語発達早期（2歳時）から表れ出している。

本研究では、先行研究での子どもの結果と親の結果を比較した。まず節構造の使用頻度では、JunもHikaruも早期から「従属節から＋主節」のほうが「主節＋従属節から」よりも多いが最多が「から」単節であるのに対し、Junの父親の最多は「従属節から＋主節」であり次いで「主節＋従属節から」そして最後に「から単節」であり、Hikaruの母親で最多なのは「から単節」であり次いで「従属節から＋主節」と「主節＋従属節から」がほとんど同頻度である。統計上は構造別使

用頻度において親と子どもの間にいずれも非常に強い相関性がある（従属節から＋主節 Pearson  $r = .962$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ；主節＋従属節から Pearson  $r = .977$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ；から単節 Pearson  $r = .894$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ）。

発話意味で比較すると、Junは理由を示す発話が各構造で最多であった一方、Hikaruは「から」単節では理由を示さない発話が最多であった。同様に、Junの父親は全ての構造において理由を表す発話のほうが多く、Hikaruの母親は複節構造ではJunの父親と同様であるが逆に「から」単節では理由を表さない発話のほうが多く。理由以外の意味では、子どもと同様に、従属節→主節の順番で従属節にある行為が主節の行為を実行するタイミングとなる「段取り」に該当する発話はどちらの親も観察されなかった。どちらの複節でも条件提示のほうをお膳立てよりも多く用いている一方で「から」単節では逆にお膳立てのほうが条件提示よりも多い。

発話計画および発話プロセスの面からみると、JunもHikaruも顕著な節間ポーズは観察されなかったが、Junの父親とHikaruの母親とも「主節＋従属節から」の理由を示す意味での主節発話後の節間ポーズが最も多かった。どちらの親も主節を発話したあとで「から」従属節で補足説明としての理由を追加して子どもに因果関係的な意味を推論させようとしたと考えられる。

## 1. 序章

先行研究 (窪田 2015) では、子どもの発話コーパス CHILDES (MacWhinney 2000; Oshima-Takane, MacWhinney, Shirai, Miyata, & Naka 1998) に基づいて記録された 2 名の子どものデータ Jun (Ishii 2004) と Hikaru (Kubota 2000, 2003, 2006) を使用し、2 歳から 4 歳までの理由を表す接続助詞「から」を挿入した三構造「従属節から+主節」・「主節+従属節から」・単独節「従属節から」の習得を分析した。

接続助詞「から」の発達・産出を伊藤 (1990, 2006) は以下の順序で唱える。①接続助詞をつけずに意味的に関係する単文を並列する。②節と節を連結詞 (例: そして・それで) で結び等位接続文にする。③大人の発話に対して「から」を伴う単節で返答する。④「主節+従属節から」の順で接続する。⑤「従属節から+主節」の順で接続する。伊藤はこの過程について次のように論じる。幼児は自己中心的で新情報を先に発話する傾向があるため、新情報である主節を発話したのちに補足説明的な「語用論的前提となる情報」(Diessel 2004: 166) つまり聞き手に既知の情報を含んだ従属節を発する方が認知的に容易であり、この過程は英語の他に Ingram (1975) の仏語の例でも共通にみられる。確かに Diessel (2004) による英語の例では、CHILDES に収録された子ども 5 名の年齢 1;8 から 5;1<sup>1</sup> のデータで 949 例全てが「主節+because 従属節」であり、うち平均 75.1% が先行する主節の後にポーズ (イントネーション終止) をおいて従属節を発しており、大半が心理的理由つまり動機や願望や要求 (例: そうしたいから) を意味していた。

しかし 窪田 (2015) の結果はこれらの見解とは異なり、子ども 2 名とも 2 歳後半から「から」単節表現を頻繁に用いて主に心理的ではない事象や行為に関する理由を示しており、複節構造も同様に非心理的理由を主な意味として「従属節から+主節」のほうを「主節+従属節から」よりも頻繁に用いた。子ども自身が文脈や進行中の話題に関する情報 (旧情報) を出した後に関連する新情報を出した場合も「従属節から+主節」を用いることが多かった。つまり情報の新旧とその順番は節の順番や「から」を伴って理由を示すか否かには発話状況などとの関連性や影響は特にないというこ

とになる。

発話計画・発話処理の見地から、英語や仏語とは反対に日本語では「従属節から+主節」のほうが「主節+従属節から」よりも早く習得され早期から頻度が高いということは、Diessel (2005) が論じるように日本語のように接続助詞が従属節の末尾にある言語の方が接続助詞が従属節の冒頭にある言語 (英語・仏語など) よりも発話プロセスがより簡素で容易であることが、習得が早い大きな要因であると考えられる。後者の言語でかつ従属節が先行する場合 (例: Because 従属節+主節) は接続詞を述べる前に「前節が理由、次節が結果」の意味順序を発話前に計画せねばならない。一方、日本語は従属節の末尾に接続助詞があるので「従属節から+主節」を発話するにあたり、まず前節の発話中に「この内容は原因にして、次に結果をのべる」計画をたてながら「から」を挿入することが可能であり、次節の前に「から」を加え「原因から結果へのつながり」を作る方が発話計画が実行または途中変更しやすくと想定される。

Diessel は「独立した発話 (主語) に連結する接続節 (従属節) は新情報を表す傾向があるが、イントネーションが結合した接続節は語用論的前提となる、つまり既知の情報を出すことが多い」(2004: 166 括弧は筆者) と主張している。つまり発話したあとにしばらくポーズをおいてから従属節を発することは、主節と従属節との間でイントネーションがしばらく停止または中断している間に補足的な新情報を計画していることになる。節間のポーズすなわちイントネーションの狭間に関しては、Hikaru には傾向はみられなかったが、Jun は 1 秒ほどポーズをおくことが「主節+従属節」も「従属節+主節」もほぼ同頻度であり、伊藤 (2006)・Diessel and Hetterle (2011)・Ford and Mori (1994) の主張する「主節+従属節」に特有とされる節間のポーズはみられない。この結果は、「主節+従属節から」が「従属節から+主節」よりも先に発達する理由として、新情報である主節を発話してから旧情報で補足説明的な従属節を発する方が幼児には認知的に容易だという伊藤 (2006) の主張をさらに弱める結果である。特に「従属節+主節」中の従属節「～から」の後のポーズは後続する主節となる結果的意味を思案中であることを示唆し、逆の場合つまり伊藤の唱える「主節+従属節」での主節の後に従属節を追加した理由説明の補助や修正の意図とは異なる。さらに、

Junの節間にポーズがあるのは状況の影響が大きいともとれる。例えば、玩具の操作に専念し手を動かして玩具の移動を見ながら間を置いて話すことが多く、対照的にHikaruは節間にポーズがほとんど観察できなかったのは、自己の行為よりも対話そのものに専念し母親を意識して反応をみようとテンポよく発話する傾向があったからと捉えられる。

発話行為からみた「から」節はつねに理由や因果関係を示すとは限らない。それ以外の意味では白川 (2009) の唱える、相手にある行為をさせるために自身から行為や情報を提供するといった相互的目的をもつ意味 (例：前提条件を示す・お膳立てする) や予定された事項を順序立てて説明する (例：段取り) という目的を際立たせる標識として「から」が用いられる事が多い。特に、主節で理由を述べたあと「だって」を従属節の冒頭に述べると、話し手が聞き手の疑念や反論を想定すると同時に理由を正当化して同意へ導こうとする態度が強く表れる (Diesel & Hetterle 2011 ; Ford & Mori 1994 ; Mori 1994, 1999 ; 白川 2009 ; Yamamoto 2003 ; Yamamoto, Matsui & McCagg 2005)。Jun と Hikaru の「から」単独節は 4 歳までずっと複節より頻度が多く、事象や状況がなぜそうなるかなどの理由を表すほかに自分がしようとする行為の宣言や相手の気を引きたい意図などの非理由的・对人的意味が 2 歳半ばから既に用いられていた。<sup>2</sup> Jun と Hikaru の複節構造にも白川の唱える語用論的な「から」節の使用はまだはっきりと出ておらず、「だって」はJunは産出せずHikaruの 4 歳時の単独節 3 件のみである。なお、理由を意味しない「から」節と主節には、節順が倒置可能な場合 (例：理由・前提条件) と不可能な場合 (例：お膳立て・段取りは「主節＋従属節」不可、「だって」挿入は「従属節＋主節」不可) がある。倒置可能性を子どもが意識して発話したか否かを示すデータ (例：倒置不可能な場合にも倒置したなどの誤り) がなかったため検証できなかったが、先行節と後続節の意味の関係づけの理解が進めばやがて先行節と後続節の順序立てができるようになると考えられる。

本研究では、こうした子どもの「から」の使用と養育者 (父親 (Ishii 2004) ・母親 (Kubota 2000, 2003, 2006)) のそれとを比較検討し、親の発話が言語習得に必要な入力情報としてどの程度子どもの言語使用に影響したとみられるか、また、相違点があるとすれば子どもがまだ習得できていない

とみられることは何かを考察する。後者の英語の例として、Diessel (2004) はbecauseを含む理由・時・条件などの副詞節や等位接続詞の母親の使用頻度と子どもの初産出年齢の早さに強い相関性を発見した (Spearman  $r = .868$ ,  $p = .001$ ,  $N = 11$ )。頻度も初産出も最多最早のand (33.5%, 2;2) に次ぐのがbecauseである (13.1%, 2;5)。だが例外があり、例えば母親のwhenとifはsoとbutより高い頻度であるが、子どもの初産出の早さは逆である。その理由としてwhenとif従属節は通常主節に先行するために、because同様に発話前に節順を考えるさいに先行詞の冒頭にくる接続詞を選ぶうえで論理性 (条件・時点設定) を示さねばならないという点で、認知発達の見点からも子どもの産出が比較的遅いとDiesselは分析している。同様にPainter (1999) もある子供において「Because従属節＋主節」の順番で従属節でテーマが与えられる発話が4歳から5歳にかけて1件のみあったが、これは周囲の話者は誰も発しなかったため口話では減多に出現しない節順であり、やがて書き言葉のほうで発展していくものだろうとみている。

## 2. 育児語・母親語のこれまでの研究

子どもの言語習得には養育者とのコミュニケーションが最重要な入力ソースとなる。養育者は子どもが乳児のうちから表情を意識したり目前のものに共同で着目したりしながらことばかけをする。大人特に母親が乳児や幼児に話しかけるための特別な言語使用域は、育児語 (child-directed speech) または母親語 (motherese) または赤ちゃんことば (baby talk) と呼ばれる。主な特徴は、ゆっくり明瞭に話す・ピッチが高い・イントネーションを誇張する・音韻の単純化・模倣や繰り返しの多用・フレーズが短い・機能語の省略などがあり、多くの言語に共通な特徴とみなされている (岩立 & 小椋 2002 ; 正高 2001)。<sup>3</sup> 育児語と子どもの言語発達との関連性は音声・統語・意味・語用など多くの面で報告されているが、言語のほか社会性の発達や自己と他者の区別や視点の転換における深い関連性も指摘されている (Shanker & Taylor 2001 ; Tomasello 2003 ; Doherty 2009)。ただし、育児語研究の大半は頻度の高い名詞や動詞やオノマトペに重点がおかれており (村瀬 et. al 1992 ; 村瀬 et. al 1998 ; 小椋 et. al 1997)、助詞の



ように一語文では現れず単独で具象の意味をなさない機能語は研究対象外とされてきた。

しかし、養育者は子どもへの話しかけを成長に合わせて微調整する (Snow 1995) のであり、言語発達以前や初期における育児語の大半は身近な名詞や動詞やオノマトペであるが、徐々に機能語も加わり統語・意味的に急速に複雑化する。特に「から」は理由を表す接続助詞の他にも多くの意味や統語的特徴をもつために様々な構造をなして頻度が上がると予想される。Clancy (1985)・Ito (1988)・大久保 (1967, 1977, 1984) の調査では理由を表す「から」は幼児が高頻度で入力し 2 歳後半～3 歳前半の言語発達早期に初産出する語の一つであることも、育児語の統語的に複雑化されていく入力の微調整の影響がうかがえる。

### 3. 節の順序と発話プロセス・意味・意図との関連性

節の順序とその頻度が言語間で違いがあるかを、Diessel (2001) と Diessel and Hetterle (2011) は大人の会話資料 (Ford 1993 ; Ford & Mori 1994) で分析した。「主節＋従属節」を用いた発話は、英語の場合にはbecauseなど理由を表す副詞節で100パーセントだったが、when等時間を表す副詞節では66パーセント、if 等条件を表す副詞節は41パーセントだった。一方、日本語の「から」従属節では47パーセントだったのに対し、時間と条件を表す副詞節では9パーセントであった。「主節＋従属節」での「から」従属節の93パーセントは主節から離れたイントネーション単位をなす一方、時や条件を表す副詞節の59パーセントが主節と同じイントネーション単位をなした。Diessel and Hetterleはこれらの結果を言語処理の影響と捉え、「主節＋従属節」は話者が主節を言ってから時間をおいた間に従属節の内容を考えて言ったために生じた構造であり、特に理由を表すのに後続の従属節は追加・補足的意味を担いがちだとみる。一方、理由・時・条件を示す「従属節＋主節」は英語 (Diessel 2005) でも日本語 (Mori 1999) でも会話より学術文書で多数をしめている。この場合は先行する従属節が「談話上の首尾一貫性を促して後続節の解釈へ導く」(Diessel 2004: 173) という「言語処理よりも優先されうる意味的かつ談話上の語用的要素に起因する」(Diessel 2005: 449) ほか、主節の解釈に必要な条件や状況の枠組みを設

定する (Diessel 2005 ; Ohori 1996) ためであるとみている。<sup>4</sup>

### 4. 「言いさし文」(白川 2009) にある「から」の意味と節構造の特徴

「から」従属節は理由や原因を表すと広義的に解釈されているが、従属節と主節との論理的な原因と結果という因果関係を常に意味するとは限らない。大人の談話では文脈・主観・対人的要素・言語外知識などからみると因果関係をなさないが二つの事象を関連づけられる状況で頻繁に使われる。また、因果関係がない場合でも主節が推測可能だとして言明されない場合には「から」を終助詞的に用いた従属節が単独で現れる。金谷 (2008) はbecauseと同様に「から」従属節が主節と因果関係をむすぶ原因用法 (～から…である) と主節を結論づけるための根拠になる推論用法 (～から…だろう) とに区別し、原因用法は主節と従属節の結びつきが強く全体でひとつの情報単位や発話行為 (陳述・疑問など) をなすのに対して、推論用法は主節と従属節がそれぞれ別の情報単位や発話行為を表すために焦点化や名詞化などの構造変換ができないあるいは変換しても文法性からは不自然な文になると指摘する。<sup>5</sup>

主節との因果関係を表さない「から」従属節の用法として、白川 (2009) は従属節だけで言い終わった文を「言いさし文」、主節と従属節からなる発話を「言いつくし」の文であると呼ぶが、どちらも用語の意味とは異なり完結した内容を示していると主張する。先行研究 (窪田 2015) に引き続き本研究もこの白川の定義を軸に「から」従属節の意味と主節との関係性を探り、養育者の発話の分析の基準とする。<sup>6</sup>

白川 (2009) は主節と従属節からなる「言いつくし」文を三つのタイプに分類している。第一に、「条件提示」(pp.41-45) である。これは、話し手が主節で示した依頼を相手に実行させるために従属節で条件を提示する。(1) (2) の従属節で述べている「お礼をすること」は、主節で述べている相手に「司会をすること」を依頼する理由ではなく、行為実現のための交換条件である。主節には聞き手に行方をうながす発話行為の意味 (命令・禁止・依頼・勧誘など) が含まれ、主節で示す要求の実現が重要であり従属節の条件は補足的なため、(1) は (2) のように節順を変更できる。(2) では行為を要求し

てから条件を追加するため、聞き手に行為「の実行を促そうとする話し手の態度がより鮮明」(ibid. p.53)になり、とりわけ行為の「実行が困難を伴うような文脈では、この表現効果はさらに増す」(ibid.)。

- (1) お礼をしますから、司会をしていただけますか。  
(2) 司会をしていただけますか、お礼をしますから。  
(窪田 2015: 27)

第二に、「お膳立て」(ibid. pp.45-48)は主節が示す行為を聞き手が実行するようにまず従属節で前提情報が示される。条件提示と同様、主節に行為をうながす発話行為の意味(命令・禁止・依頼・勧誘など)が含まれる。(3)では「そこにソースがある」という前提を与えないと「自由にとって下さい」という勧誘だけでは何をにとっていいのかが不明確である。このタイプは従属節の意味が主節の行為をさせるためのお膳立てつまり前提であるため、従属節は主節に先行するが(3)後続はできない(4)。

- (3) そこにソースがあるから、自由にとって下さい。  
(Alfonso 1966: 545 ; 窪田 2015: 27 ; 白川 ibid. p. 39)  
(4)\* 自由にとって下さい、そこにソースがあるから。  
(窪田 2015: 27)

第三に、「段取り」(ibid. pp.48-51)も条件提示やお膳立てと同様、主節に行為をうながす発話行為の意味(命令・禁止・依頼・勧誘など)が含まれる。このタイプでは従属節は話し手が予定している筋書きの一部を表し、聞き手が主節の内容を実行に移すタイミングがあらかじめ従属節で指示されている。すなわち従属節で最初に実行すべき行為を述べてから次の主節で後続する行為を一定の順序で指示しているため、従属節は主節に先行するが(5)後続はできない(6)。

- (5) 鍋にカレー粉が入りますから、焦がさないようよく混ぜ、火を止め、さします。  
(6)\* 焦がさないようよく混ぜ、火を止め、さします、鍋にカレー粉が入りますから。  
(窪田 2015: 27)

一方、因果関係は表すが「主節+従属節」のみ可能な典型として、日常会話で用いられる「だって…から」従属節がある。「だって」は「から」なしでも単独節となり、主な意味としては主節の内容に聞き手が疑念や反論をもつだろうと話し手が想定した場合に後続の従属節の理由を正当化したり(Diesel & Hetterle 2011; Ford & Mori 1994; 白川 2009 ; Yamamoto 2003)、話者の自己納得的な理由の前触れを示したり(白川 2009)、相手への同意・詳述を通して(Mori 1999)聞き手を同意へ導こうとする(Mori 1994)などがある。「だって」は前述の理由を正当化することによって聞き手の同意を得ようとするため、主節の後に来ることができても(7)先行できない(8)。

- (7) 旅行には行かない、だってお金がないから。  
(8)\* だってお金がないから、旅行には行かない。  
(窪田 2015: 28)

主節を伴わない従属節が接続助詞を伴い終了する「言いさし文」(白川 2009)において、通常終助詞として扱われている「から」の用法は文脈に意味の関連性を依存する。この単独節は複節より主観的な意味をもつ(東泉 2006)が、談話レベルでは接続助詞のない言い切りの文と同等の意味の完結性を持つと白川は指摘する。

上述の複節構造と同様、理由や原因の他に、白川は「から」単独節も「条件提示」と「お膳立て」の発話行為の意味に分けて説明する。

- (9) A : もう帰るの?  
B : (だって) 終電の時間だから。  
(10) A : 司会は自信がないよ。  
B : お礼をしますから。  
(11) 後ろにワインがありますから。  
(窪田 2015: 28)

相手の発話(9A)を主節と捉えた従属節として(9B)は追加的に理由を示し、「だって」を加えると自己の言動を正当化して同意を求める意図が強くなる。(10)は条件提示(白川 op. cit., pp. 54-56)であり、(10B)は相手に行為(10A)で含意された行為(「司会をすること」)を実行させようと条件を提示している。(11)は「お膳立て」(ibid. pp.57-60)の意図があり、「(後ろにワインがある、だから)ワインを召し上がって下さい」という主節になりうる意

図を状況から相手に推定させる効果がある。なお、「段取り」は従属節と主節とを統合した行為の順序づけが必要なため、単独節で表現するのは「原理的に不可能であろう」(ibid. p.60)。

また、「から」単独節には話し手が主節で言いたいまたは言いたくない態度や心情を相手に察してほしい場合にも用いられる (Ohori 1995)。(12)のように話し手が苛立つ理由を単独節で表すと聞き手の同調をひく効果があり、「だって」を冒頭に述べると情意性を強める効果がある (大津 2013)。

(12)A：結局、自分一人でしたの？

B：(だって)あの人、何にもやってくれないから。 (窪田 2015: 28)

(12)でAの質問に対しBが「あの人は何もしてくれない」という理由からくる態度 (例：「だから腹が立つ・嫌いだ」)を主節で明言しないのは、「から」単独節を述べたあと間をおいて謙虚や躊躇を示すことで聞き手に話し手の態度を察する余裕を持たせる効果があり (Mori, 1994)、特に聞き手が同意しないと想定できる場合 (Mori, 1999)はその傾向がある。荻原 (2008)は話し手と聞き手がこうした単独の従属節「いいさし文」から発話内容と意図を共有して目的を達成するには、聞き手には状況の他に話し手の心的態度を推測する心の読みが必要だと主張する。<sup>7</sup>

## 5. 疑問と検証すべき点

先行研究 (窪田 2015) 同様、親の発話を CHILDESコーパス (MacWhinney 2000 ; Oshima-Takane, MacWhinney, Shirai, Miyata, & Naka 1998)を用いて主に以下の観点から、親の発話の特徴と子どものそれとの共通点や相違点を検証し考察した。

1. 構造：複合節の順序 (「従属節＋主節」「主節＋従属節」)・「から」従属節 (単独節)
2. 意味<sup>8</sup>：理由 (「なぜ＋主節 (または前発話や状況)なのか?」の質問をした場合に (または質問を想定し)、理由や原因を含む答えとなる内容  
非理由 (上記の質問に対する答えにならない内容；白川 (2009)による条件提示やお膳立てや段取りなど)

3. 発話行為：新旧情報 (前発話との関連性や補足説明)・心的態度・節間のポーズ (CHILDESデータで [#] または [,] と記載されたもの、または 1 秒以上の間隔のあるもの)

## 6. データ

Jun (Ishii 2004; 男児・兄と姉がいる)はインターネットのCHILDESサイト (<http://childes.psy.cmu.edu/>)で一般公開されている音声と動画資料からなるデータで、Hikaru (Kubota 2000, 2003, 2006 ; 女児・姉がいる)は母親が録音した音声資料のデータである。CHILDESコーパスに基づいて記録されたこれらのデータから記録された発話の最も多い養育者であるJunの父親とHikaruの母親の対象児への発話を調査した。データファイル各 1 セッションは毎週約30分の家庭内対話であり、録音された年齢はJunが 2;4から3;8、Hikaru は 2;4から 4;11までである。資料サイズに隔たりがあるが (Jun 3.4MB, Hikaru 5.4MB)、言語発達の目安の一つとして多くの言語で使用される平均発話長 (Mean Length of Utterance : 一発話内の形態素数 ; Brown 1973)の月齢毎の最高値はJunが 2.94でHikaru 3.38であり大差はない。先行研究 (窪田 2015)での子どもの言語分析と同様に、親の発話も月齢半年毎に節構造で発話を分類したが、前発話の繰り返しは分析から外して意味が不明または複数考えられる発話は「不明」とした。「から」と同義の方言 (例: Junの京都弁「し」「さかい」Hikaruの長崎弁「けん」)は地域的使用差があるため分析から外した。

## 7. 分析結果：概観

先行研究 (窪田 2015)での子どもの結果と本研究の表 1にある親の結果を比較しつつ概観する。まず節構造の使用頻度では、JunもHikaruも早期から「従属節から＋主節」のほうが「主節＋従属節から」よりも多いが最多が「から」単独節であったが、表 1 ではJunの父親の最多は「従属節から＋主節」であり次いで「主節＋従属節から」最後に「から単独節」であり、Hikaruの母親で最多なのは「から単独節」であり次いで「従属節から＋主節」と「主

節＋従属節から」がほとんど同頻度である。統計上は構造別使用頻度において親と子どもの間にいずれも非常に強い相関性がある（従属節から＋主節 Pearson  $r = .962$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ；主節＋従属節から Pearson  $r = .977$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ；から単独節 Pearson  $r = .894$ ,  $p < .05$ ,  $N = 12$ ）。

発話意味で比較すると、Junは理由を示す発話が各構造で最多であった一方でHikaruは「から」単独節では理由を示さない発話が最多であった。この傾向は親も同じで、表1ではJunの父親は全ての構造において理由を表す発話のほうが多く、Hikaruの母親は複節構造ではJunの父親と同様であるが逆に「から」単独節では理由を表さない発話のほうが多く。Junと同様に父親も「だって」の発話は「から」との連鎖以外にもみられなかった。Hikaruと同様に母親も（Hikaruより頻度は低い）単独節で「だって～から」の使用が1回のみである。父親の「だって」がデータ記録のない普段の会話でもほとんど発話されなかったと想定すると、Junにその使用はおろか「だって～から」への複節構造はデータの終了する3歳8ヶ月時点では発達していなかったとみえる。

「なぜ・どうして～なのか」という疑問への理由を示す答えとしての「から」単独節を比較すると、Junが父親よりも多く用いているが逆に母親の方がHikaruよりも多く用いている。これは質問者の役割を担うのが前者ペアでは父親、後者ペアでは子ども（Hikaru）に偏ったためと想定できる。理由以外の意味では、子どもと同様に、従属節→主節の順番で従属節にある行為が主節の行為を実行するタイミングとなる「段取り」に該当する発話はどちらの親も観察されなかった。成人発話でも「段取り」の用例は比較的少ないと白川（2009）は述べているが、親から子どもへの発話で物事を執り行う順序や方法などを説明する場合は「から」を用いるのではなく接続詞をほとんど用いず一発話ごと丁寧の説明する傾向があった。「言いさし文」（白川 2009）にあたる著しい例はJunとHikaruには見られなかったが、Junの父親もHikaruの母親もどちらの複節でも条件提示のほうをお膳立てよりも多く用いている一方で「から」単独節では逆にお膳立てのほうで条件提示よりも多い。

発話計画および発話プロセスの面からみると、英語の子どもの発話をみたDiessel（2004）は主節から従属節へと節間イントネーションが連続した

場合は語用論的前提となる既知の情報を出すことが多く、直前の発話と意味上で関連する従属節を聞き手が解釈するのに役立つと主張する。JunもHikaruも顕著な節間ポーズは観察されなかった。どちらの親も一部ファイルでは音声が届きづらく節間ポーズを確認できなかったが、表1ではポーズが1秒以上確認できた発話では、Junの父親とHikaruの母親とも「主節＋従属節から」の理由を示す意味での主節発話後の節間ポーズが最も多かった。これは3章でみたDiessel and Hetterle（2011）とFord and Mori（1994）による大人の発話分析で後続の「から」従属節は主節から離れたイントネーション単位をなす傾向が非常に強いことと同じ結果である。どちらの親も主節を発話したあとで「から」従属節で補足説明としての理由を追加して子どもに因果関係的な意味を推論させようとしたと考えられる。

## 8. 結果と考察：諸例から

最初に、複節・単節構造での理由を表す「から」と表さない「から」を親がどう発話していたのかを、発話状況や親の子どもの言動に対する発話意図から探る。まず「従属節から＋主節」で理由を意味する節間ポーズのない発話（13）（14）（15）（16）とある発話（17）（18）をみる。

（13）母：靴下どこ脱いだん？

Hikaru：ん？

母：靴下脱いだからはながでとるよ。

（2；7.29）（Kubota 2000, 2003, 2006）

（14）Jun:（おもちゃの飛行機を持って）ぴゅうー、しゅー。

父：こっち羽がないから飛ばないやんか。

（2;6.2）（Ishii 2004；括弧内補足説明は筆者）

（15）父：危ないからなぶったら（触ったら）だめ、それ。

Jun：なに、こえ（これ）。

（2;3.4）（ibid.；括弧内補足説明は筆者）

（16）母：だめそれママのママの。

母：これ、あ、ちょっとこれ、口紅付けるからだめ。

（2;4.27）（Kubota 2000, 2003, 2006）

（17）Jun：（除雪車の絵を見て）雪のせる、のけんの？



父：うん、(雪が積もった道路には)自動車走  
らないからね(ポーズ)雪のけるの、それ。  
(2;9.8) (Ishii, op. cit. ;括弧内補足説明は筆者)  
(18) Hikaru : (自分の耳の掃除を) あーあやろう  
と思ったのに！  
母：ああいいわよはい取るから(ポーズ)動  
いたらいけんよ！  
(4;11.13) (Kubota, op. cit. ;括弧内補足説明は筆者)

(13) (14)は物理的で可視的な因果関係を示して  
いるが、(15) (16)のように従属節で理由を述べて  
から主節で禁止をして聞き手(子ども)に理由と  
禁止との関連づけである行為をさせないようにす  
るのは特にJunの父親に多くみられる。どちらの  
ペアも二人で一つの作業(玩具遊び・絵本読み・  
掃除など)をしている場面が殆どのためか、節間  
ポーズが1秒以上ある発話(17) (18)では、発話  
産出そのものに集中するよりも玩具を直したりや  
耳の中を見ながらなど緻密な操作に集中しながら  
話しているためポーズがあいたとも考えられる。  
(17)では父親は節間にポーズをおいて子どもの前  
発話の内容をテーマとして最初の主節ではなく後  
続の従属節で繰り替えしている。

次に、「従属節から+主節」で節間ポーズのない  
理由を示さない条件提示(19) (20)をみる。

(19) Hikaru : あー おかあさんそれ見せて！  
母：見してあげるから先こっち入んな。  
(2;10.0) (Kubota, op. cit.)  
(20) Jun : ほら、おち(足?) …。足こんな…。  
父：靴下ちゃんとしてあげるからこっち来  
なさい。  
(2;11.16) (Ishii ibid. ;括弧内補足説明は筆者)

(19) (20)は親は子どもに条件を提示して子ども  
がとるべき適切な行為を即座にさせようとするた  
め、主節は命令を意味することが多い。いずれも  
子どもの前発話をもとに(Hikaruの「見せて」、  
Junの示す足から緩んだ靴下)親がそれに関連する  
テーマを従属節で条件づけている。このタイプで  
節間ポーズがあるのはどちらの親にもみられな  
かった。また、お膳立てを意味する発話もなかつた。  
お膳立ては4章でみたように最初に従属節で前提  
を与えないと聞き手に主節の行為をさせられない  
ために後続はできない。条件提示と同様にお膳立  
ても主節で禁止や命令や勧誘などを示すが、白川

は条件提示とお膳立ての相違点は、後者は「『か  
ら』を『だから』に変えて表現できない」(2009: 47)  
点であると主張する。(3)を「だから」で置き換え  
た例が(22)である。

(22) ?そこにソースがあります。だから、自由  
にとって下さい。

(22)が不自然な解釈になるのは、二つの命題を「だ  
から」で結ぶと「理由/原因→結果」の因果関係が  
成立するべきところを、「そこにソースがある」と  
「自由に(それを)とっていい」という命題にはそ  
うした関係性が希薄なためである。この点とJun  
の父親とHikaruの母親がお膳立てを用いなかつた  
理由とに関連性はない。しかし、日常で指示対  
象物が目前にある状況で「お膳立て」されること  
は、2歳から4歳代の子どもにとって難解な解釈  
を求めるとは考えられないため、「従属節から+主  
節」での親の使用がなかったことには偶然であつた  
としか推測できない。

一方、「主節+従属節から」は、3章で言及した  
Diessel and Hetterle (2011)とFord and Mori (1994)  
によると、成人発話の「から」複節構造のうち47  
パーセントでうち93パーセントが主節から離れた  
イントネーション単位をなす。表1にあるように、  
Junの父親もHikaruの母親もこの節順の方が逆の  
節順より節間ポーズが多かった。特にHikaruの  
母親の場合、理由を表す意味で後続の従属節の前  
にポーズが1秒以上ある発話とポーズのない発話  
とはほぼ同数である。つまり独立したイントネー  
ションで主節の後に補足的に理由説明をしている。  
その例が(23)と(24)である。

(23) Hikaru : だっこだっこ！

母:だっこしない！(ポーズ)あ、歩いたから。  
(2;5.27) (Kubota, op. cit.)

(24) 父：はい、そっち行ったらだめ(ポーズ)熱  
い熱いから。 (1;10.15) (Ishii, op. cit.)

(23) (24)ではHikaruの「だっこ」を聞いた母親と  
Junの歩く方向を見た父親が、その言動をテーマ  
とした禁止の意味の発話が先行する(「だっこし  
ない」「そっち行ったらだめ」)。まず最初に子ども  
の言動を禁止することに親の注意が向き、それか  
ら新情報として子どもになぜ禁止するのか納得さ  
せる理由づけをしている。ポーズを1秒以上おい

て発話した著しい特徴は見いだせないが、禁止するに妥当な理由をすぐに発話に移せたかどうかの違いとみられる。

「主節＋従属節から」の理由を表さない発話では、特にJunファイルに音声が入った部分が多かったため節間ポーズ有無の比較は困難であるが、Junの父親は条件提示のほうがお膳立てが多いが、Hikaruの母親には条件提示やお膳立てはない。

(25) Jun：あ、ああ、あ！（スリッパがテーブルの下に落ちたのを見て）

父：うん、こっち来なさいちゃんとしたげるから。

(2;2.12) (Ishii, op. cit.；括弧内補足説明は筆者)

「主節＋従属節から」の条件提示には親が命令や要望をまず出してから、子どもが受け入れられそうな条件を挿入したほうが、白川 (2009) が指摘するように話し手の主節の事柄を実行させたいという態度がより鮮明になる。(25)で父親はJunの驚きに対して命令（「こっち来なさい」）を最初に示してから行為を実行させる条件（「ちゃんとしたげるから」）を述べている。

「から」単独節に関して、(26)のようにJunの父親は理由を表す発話のほうが条件提示 (28) やお膳立てが多い。Hikaruの母親のほうが (27) のように子どものなぜという疑問に答える理由が多い。が、Hikaruの母親には理由を表さない発話のほうが多くあり、条件提示 (29) よりも大半がお膳立てを表している。

(26) Jun：これお父さんの。

父：大きいから？

Jun：大きいでからお父さんの、これ。

(2；6.2) (Ishii, op. cit.)

(27) Hikaru：なんで？

母：風が入ってくるから。

(3；5.30) (Kubota, op. cit.)

(28) 父：はい、今度じゅんくんして。

Jun：はい。

父：お父さん足を、足をもってるから。

(2；7.20) (Ishii, op. cit.)

(29) Hikaru：（歯磨きの途中で歯磨き粉がなくなりかけ、新しい歯磨き粉を見て）  
かるちゃん（ひかるちゃん）の。

母：むこうで仕上げ磨きしたげるから。

(3;7.17) (ibid.；括弧内補足説明は筆者)

(26)はJunの発話に父親が「から」単独節で理由を問うている。Junはその質問にあるトピック（「大きい」）を前発話から保持して「従属節から＋主節」で答えている。(28)ではJunがすでに父親の提案（「今度はじゅんくんがする」）を承諾しているが、父親はあくまで補足的な条件（「足を持っているから（しなさい）」）を提示している。(29)は母親が条件を出してHikaruが言及するもの（「歯磨き粉」）を使って行為が継続できること（「歯磨き」）を確約している。

前述 (11) でみたお膳立てを表す「から」単独節は終助詞的な「から」の意味である。白川はこの言いさし文は前提が新情報として「聞き手が実行しようと思えば実行できるように」(2009: 57 強調ママ)」、聞き手に「それを参考にして自分の行動を決めて下さい」(ibid.: 59) と行為の選択を委ねている。先行研究 (窪田 2015) のJunやHikaruのこうした発話では相手の注意を引いたり行為を実行する宣言ととれる意図がみられた。親のお膳立ての場合はそうした自己から相手への働きかけという意図の他に、子どもが発話内容を理解するまたは注目するよう強調して述べている。

(30) 父：（ビデオレコーダーが）パーンってまだいうてない。

Jun：うん。

父：もうすぐパーンっていうから。

(3;1.10) (Ishii, op. cit.；括弧内補足説明は筆者)

(31) Hikaru：かるちゃん（何か言いかけて）。

母：今日早く食べてからもう車に乗っていきからね。

(2;5.28) (Kubota, op.cit.；括弧内補足説明は筆者)

(30)は父親の前発話をJunは理解しているが、繰り返してお膳立てすることによって発話内容を強調している。(31)は参考程度の情報提供という緩やかな意図ではなく、母親の発話意味だけでは2歳半のHikaruが解釈するのは難しいかもしれないが、情報を提示する（「今日は普段より早く出かけること」）ことによりそれにふさわしい行為（「だから急いで行動すべき」）を適切に行なわせることを要求した意図が見える。お膳立ての「から」

対象者	節構造	意味	子どもの月齢								タイプ別総計	総数
		理由を	1;0-1;5	1;6-1;11	2;0-2;3	2;4-2;5	2;6-2;11	3;0-3;5	3;6-3;11	4;0-4;11		
Jun の父親	従+主	示す	2	3	11	6	56 + 3P	31 + 2P	10 + 1W		119 + 5P + 1W	125
		示さない			1C	2C	7C	5C + 1A%			15C + 1A%	16
		不明										
	主+従	示す		3P	2	5	27 + 12P + 6%	3 + 6P + 14%	6 + 5P		43 + 26P + 20%	89
		示さない	1CP		1C + 1CP		2C + 1CP + 1A%	1A%			3C + 3CP + 2A%	8
		不明										
	単独	示す			2	1	26 + 1W	23 + 1W	7 + 2W		59 + 4W	63
		示さない				1C	4A + 2C	1A	2A		7A + 3C	10
		不明					1	1				2
Hikaru の 母親	従+主	示す				10 + 1P + 1W	10 + 3P + 1W	8 + 1P	8	6 + 1P	42 + 6P + 2W	50
		示さない				1C	1C	1C	3C	1C	7C	7
		不明				1	1				2	2
	主+従	示す				4 + 1P + 1%	8 + 5P + 1%	7 + 5P	1 + 5P	6 + 7P	26 + 23P + 2%	51
		示さない										
		不明										
	単独	示す				3W	6 + 1W + 1WD	4 + 1W	5W	1W	10 + 11W + 1WD	22
		示さない				6A	6A	6A + 1C	11A + 1C	7A	36A + 2C	38
		不明				2	1	1		1	5	5

表1 Junの父親とHikaruの母親の「から」使用の月齢比較（空白はゼロを示す）

注：P：節間ポーズあり W：理由を聞く質問への答え D：だって～から C：条件提示 A：お膳立て %: 音声不明瞭

が複節構造では殆どなかったのに比べて、「から」単独節が特にHikaruの母親に多い理由として、注目すべき情報提示を強調する意図の他に、命令や依頼や禁止などを表す主節を言わなくても子どもには理解できるだろう、という親の推論が働いたためと想定される。

## 9. 結論

以上のデータ検証と考察を整理すると以下の通りとなる。第一に、最も産出した構造では子どもは早期から「から」単独節つまり言いさし文であり、親のほうはJunの父親は「従属節+主節」でありHikaruの母親は「から単独節」であった。どちらも子どもの前発話をうけてテーマ（既知情報）とし、それを「から」節で受けて発話する傾向がある。どの親も「だって～から」の使用がほとん

どなかったため、その影響で子どもも滅多に用いなかったとも考えられる。意味はどの構造も理由が最多であるが、例外はHikaruの母親の「から」単独節のお膳立てである。お膳立ては話し手が聞き手に参考にしてほしい情報を提示するが、この終助詞的な「から」は終助詞「よ」と同様に念を押した意図となる。白川（2009）はこうした終助詞的「から」言いさし文を『話し手の聞き手の間の認識のギャップをうめる』意図を明示的に表現する（p. 170）と主張する。自分の指示対象物や行為または話題を相手にも着目・理解してほしいとする意図が、Hikaruの母親のお膳立て「から」の使用になり、Hikaruの「から」単独節使用に影響したともいえよう。親の発話には、自分や子どもの前発話をうけテーマにして最初に「から」従属節を言うこともあれば、主節でテーマを述べて後で従属節を言うこともほぼ同等にあり、テーマつまり既知情報とテーマつまり新情報と最初に来る

節との関連性はみられなかった。これはDiessel (2005)の主張する「から」接続助詞が従属節の末尾にあるために、それを言っている途中で最初の節に理由・お膳立て・条件いずれかの意味を加えようと発話計画を産出途中で変えた柔軟性が想定される。子どもの発話には見られなかったが、親の節間イントネーションと新旧情報の出し方の関連性については音声欠損部分があつて具体的な見解はできないが、主節を述べてから数秒おいて従属節を述べる場合はどちらの親も新情報(禁止や要請をする理由や条件など)を出すことが多い。子どもは初期から親の複節構造も多く入力しながら、「から」単独節からやがて理由と結果の因果関係をもとに複節の「従属節から＋主節」そして「主節＋従属節から」の構造を発達させていくとみられる。その過程で、「から」は理由を示すだけでなく条件とくに単独節では要求されている行為の前提となることを示されることによって、発話そのものを強調したり注意をひくような効果があることを理解して自分も使用するようになると考えられる。

今後の課題としては、構造の発達と意味の連結性の発達のほか、対象とする幼児の事例を縦断的かつ横断的にさらに多く分析し、親の発話インプットとの関連性と本研究のJunとHikaruとその親に見られた特徴が他の親子対話でも顕著な特徴としてみられるか否かを検証することである。さらに、先行研究(窪田 2015)と本研究で意味分析の基準として採用した白川 (2009)の理由を意味しない「から」である条件提示・お膳立て・段取りの定義には「何らかの行為実行のために参照すべき前提情報を提示する、という点においては、3つの用法は共通しており、まさに、これがカウ節の本質的な機能だと考えられる」(ibid., p.68)と捉えるが、定義の境界があいまいなこともあり、用例によっては一つの用法に収まらない可能性が残る。さらに、東泉 (2006)・Higashiizumi (2006)・金谷 (2008)が理由を表す「から」と区別する推量「だろう」の根拠となる「から」の用法に関しても、白川は厳密な区別をしていない。発話意味分析の基盤となる構造・意味分析においてもさらに多くの理論を吟味する必要がある。

注

1 子どもの年齢の表記は、年：月または年：月.日で表す。親の

発話が記録された時期も、親ではなく子どもの年齢の表記を用いる。

2 これは大人の談話では「言いさし文のうちの『お膳立て』用法」(白川 2009)に近いものともとれる。(i)のような「お膳立て」用法では話し手は聞き手の行為を予測してその実行に必要な前提情報を従属節のかたちで与えているが、実行するか否かは聞き手が決めればよいと聞き手の判断にゆだねている。

(i) そこにソースがあるから、自由にとって下さい。

(Alfonso 1966: 545 ; 白川 2009: 39)

しかし、話し手が具体的に聞き手にどのような行為を期待しているのか文脈から容易に判断がつく場合とそうでない場合があることを白川は指摘する。白川は、これは終助詞的用法として処理されることが多いが、話し手は「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示している」と解釈できる」(p.60 強調ママ)ゆえに接続助詞の用法の一部としている。先行研究(窪田 2015)と本研究では、子どもが言いさし文として「から」単独節で自己の行動を宣言・主張している点においては、話し手(子ども)が具体的にどんな行為をどの程度まで聞き手(親、養育者)に期待していたかが文脈や発話状況から不明確な事例が多かったため、白川のいう言いさし文のお膳立て用法としては分類しなかった。しかし、省略された(文脈から予測可能な)主節が「(だから)見ていて」「(だから)大丈夫だよ」などを意味するであろうと想定すると、自己から相手への働きかけを意味するのみならず聞き手に着目してほしい情報を与えていることは明らかであるので、特に相手に行為をうながさないが「お膳立て」用法の萌芽としても解釈できるだろう。

3 日本語の赤ちゃんことばに関して正高 (2001)は「独特の擬音語、擬態語が助詞を省略した文中で、非常に頻繁に用いられる」(p.61) ために文化を問わず普遍的特徴の多い育児語と混同してはならないと唱える。正高はさらに、日本語で赤ちゃん用に語彙を多様に変化させるのは日本人の赤ちゃん中心主義の影響もあるであろうが、欧米語とは異なる日本語の特殊性(大人同士の会話と子どもへの話しかけを比較した場合の統語・語彙的な差異の大きさなど)も日本語の赤ちゃんことばを大人の日本語と比較検討する上での注意点としている。

4 意味的・語用的側面からみると、従属節は主節が提示されたあとで発話行為的な意味(陳述・注意喚起や強調のための主張など)を補足する場合は、英語の例 (ii) bや (iii) bのように節順を逆にできない。

(ii) a. We should go on a picnic, because isn't it a beautiful day!

b. \* Because isn't it a beautiful day, we should go on a picnic.

(Lakoff 1984: 473)

(iii) a. I'm leaving, because here comes my bus.

b. \* Because here comes my bus, I'm leaving.

(Lakoff, ibid., pp.472-473)

日本語も節の意味や語用面の特徴が節の順序に関係する。詳細は4章で述べる。

5 東泉 (2006)とHigashiizumi (2013)はbecauseと「から」の通時的分析を行い、どちらも構造的には従属関係(「従属節から＋主節」「主節＋because従属節」)からより並列的な節構造(「主節＋従属節から」「主節＋because従属節」：英語は前段階と節順は同じ)をへて非従属節(単独節)へと拡張し、意味的には理由から発話行為的な意味をおびてより主観的な意味へと拡張するという文法化するかわち機能拡大が生じたと主張する。

6 先行研究(窪田 2015)と同様、「から」に他の語が付加された場合は次のように扱う。「から」に話者の態度を表す終助詞(例：さ、よ、ね、な)が付加された場合(例：「雨が降ってたからさ、家にいたよ。')も従属節としての機能は変わらないため分析に含める。さらに、「から」単独節に断定の助詞(例：よ、ね、だ、です、や(関西方言))がつく場合もない場合との大きな意味変化はないために分析に含める。ただし、「から」従属節に否定連語「じゃない・ではない」が付加された場合(例：「雨が降ってたからじゃない?」「ひまだったからではない。')は「から」節は命題の判断のもととなる名詞節に含まれるために分析には含めない。



- 7 さらに白川 (2009) は、なぜそうなるのかという問題を前提に  
していない「から」の例として、「自己納得的な『から』」(pp.110-  
114)と「聞き手の自己納得を誘発する『から』」(pp.115-119)を挙  
げている。
- (iv) A: あの人、また歌集を自費出版したんだよ。  
B: 旦那が眼科医でセレブだから。
- (iv) では聞き手Aの発話をうけ話し手Bは自分の背景的知識に  
てらしてAの発話の理由を確認し納得している。この自己納得  
的「から」は、白川に従うと、理由を同定して事実関係として  
帰結を直接結ぶ「～なのは…からだ」とは発話意図が異なる。
- (v) あの人かまた短歌集を自費出版したのは、旦那が眼科医  
でセレブだからだ。
- 因果関係を強調する (v) と違って (iv) ではBは因果関係を設定  
するのでもAを納得させることを要求されているのでもない。  
Aが言った情報をもとにBが自分の知識「あの方は旦那が眼科医  
でセレブだ」と照合して「旦那が眼科医でセレブだ→裕福だ→  
高額な自費出版をするお金がある→また短歌集を自費出版し  
た」、という「自然な帰結として納得が行く(=『どうしてそう  
なのか』ということの問題にならない)」(白川 2009: 113 強調マ  
マ)という内容を「から」単独節で述べている。また、(iv) が聞き  
手の自己納得をうながす「から」と解釈できる場合にも、話し  
手の自己納得と同様に「なぜそうなるのか」という因果関係へ  
の問題設定もなければ聞き手を納得させることを要求されて  
いるのでもない。しかし、聞き手Aの発話を話し手Bが納得し  
その理由になりえる内容を「から」単独節で提示することによ  
って結果的に聞き手Aも納得させる効果がある。白川の分析で  
は、こうした話し手や聞き手の自己納得をうながす「から」は、  
問題設定や理由説明を前提としておらず、内容的に主節は「か  
ら」従属節の「既に明らかな事実の自然な帰結として自己納得  
されている」(2009: 125)。しかし本分析では、この二者の発話  
から自然に得られる帰結も結果的には理由説明となる因果関  
係として見なし、理由を表す「から」に含める。
- 8 「から」の意味分類に関して東泉 (2006)・Higashiizumi (2006)・  
金谷 (2008) は、主節の原因や理由を表す「から」(vi) とは異なり、  
推量の「から」(vii) (viii) は主節の内容を結論づけるための根拠  
が従属節で示されていると主張する。
- (vi) 太郎は花子愛しているから戻ってきた。  
(Higashiizumi 2006: 117)
- (vii) 太郎は戻ってきたから、花子愛しているのだらう。  
(ibid. p. 118)
- (viii) 君の宿題は僕がやっておいたから、一緒に遊ぼうよ。  
(金谷 2008: 116)
- こうした推量の「から」は白川 (2009) の「言い尽くし」や「言い  
さし」文の定義では具体的に言及されていないが、本分析では  
白川の理論に従うため、(vii) のような「～から…だろう」と主節  
が推量になる文は理由 (主節の根拠) を表す発話に、発話行為  
を含意する (viii) のように「～から…しよう」と主節が勧誘や禁  
止などの発話行為を促すものは従属節の意味も加味して理由  
を表さない「から」(条件提示・お膳立てなど) に分類する。

参考文献

Alfonso, A. (1966). *Japanese language patterns*. Sophia University.

Bates, E. & MacWhinney, B. (1979). The functionalist approach to the acquisition of grammar. In B. MacWhinney (Ed.), *The emergence of language*, (pp.157-193). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Bruner, J. (1983). *Child's talk: Learning to use language*. Oxford: Oxford University Press.

Clancy, P. (1985). The acquisition of Japanese. In Dan I. Slobin (Ed.), *The crosslinguistic study of language acquisition, Vol., 1: the data*

(pp.372-524). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Clark, E. (1973). How young children describe time and order. In C. A. Ferguson & D. I. Slobin (Eds.), *Studies of child language development* (pp.585-606). New York: Holt, Reinhart and Winston.

Clark, E. (2009). *Language acquisition. Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Diessel, H. (2001). The ordering distribution of main and adverbial clauses: a typological study. *Language*, 77, 343-365.

Diessel, H. (2004). *The acquisition of complex sentences*. Cambridge: Cambridge University Press.

Diessel, H. (2005). Competing motivations for the ordering of main and adverbial clauses. *Linguistics*, 43, 449-470.

Diessel, H. & Hetterle, K. (2011). Causal clauses: A cross-linguistic investigation of their structure, meaning, and use. In P. Siemund (Ed.), *Linguistic Universals and Language Variation* (pp.21-52). Berlin: Mouton de Gruyter.

Doherty, M. J. (2009). *Theory of mind: How children understand others' thoughts and feelings*. Hove: Psychology Press.

Ford, C. E. (1993). *Grammar in Interaction: Adverbial clauses in American English conversations*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ford, C. E. & Mori, J. (1994). Causal markers in Japanese and English conversations: A cross-linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics*, 4, 31-61.

Green, G. M. (1976). Main clause phenomena in subordinate clauses. *Language*, 52, 382-397.

Higashiizumi, Y. (2006). *From a subordinate clause to an independent clause: A history of English because-clause and Japanese kara – clause*. Tokyo: Hitsuzi Shobo.

Higashiizumi, Y. (2013). More thoughts on stand-alone because-clauses from a historical-pragmatic perspective. Paper presented at the 16th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan, Keio University.

東泉裕子. (2006). コーパスに基づく文法化研究：日英語の理由節の通時的研究. 「言語処理学会年次大会予稿集」.

Ingram, D. (1975). If and when transformations are acquired by children. *Georgetown University Round Table on Language and Linguistics* (pp.99-128). Washington DC: Georgetown University Press.

Ishii, T. (2004). *Japanese: Ishii Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 159642-054-5.

Ito, K. (1988). On the acquisitional strategies of complex sentence formation: Examples from Japanese and English speaking children. *Gogaku Kenkyu* [Linguistic Studies]: Center for Language Studies, 10, 121-135.

伊藤克敏. (1990). 「ことばの習得と構造」. 東京：勁草書房.

伊藤克敏. (2005). 「ことばの習得と喪失」. 東京：勁草書房.

伊藤克敏. (2006). 接続文構造の習得方略. 「小泉保博士傘寿記念論文集」: 言外と言内の交流分野, 東京：大学書林, 57-62.

岩立志津夫 & 小椋たみ子 (編). (2002). 「言語発達とその支援」. 京都：ミネルヴァ書房.

金谷優. (2008). 対照構文文法にむけて－英語のbecause構文と日本語のカラ構文－. *JELS*, 25, 111-120.

Kubota, M. (2000). Development of a Japanese two-year-old's turntaking in mother- child conversation. *Tsuda Inquiry*, 21, 3-19.

Kubota, M. (2003). Development of a Japanese child's response patterns to her mother's clarification requests: Clarification with interpersonal intentions. *Tsuda Inquiry*, 24, 196-211.

Kubota, M. (2006). A comparative study of parental and child contextual self-repairs upon non-specific clarification requests. *Tsuda Inquiry*, 109-126.

窪田美穂子. (2015). 2～4 歳児による理由を表す接続助詞『から』の習得. 「東京造形大学研究報」, 16, 23-34.

Lakoff, G. (1984). Performative Subordinate Clauses. *Proceedings of*

- the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, 472-480.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk: Third edition, Volume 2: The Database*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 正高信男. (2001). 「子どもはことばをからだで覚える」. 東京: 中公新書.
- Mori, J. (1994). Functions of the connective datte in Japanese conversation. In: N. Akatsuka (Ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 4, (pp.147-163). Stanford: CSLI Publications.
- Mori, J. (1999). *Negotiating agreement and disagreement in Japanese: Connective expressions and turn construction*. Amsterdam: John Benjamins.
- 村瀬俊樹, 小椋たみ子 & 山下由紀恵 (1992). 育児語の研究 1: 動物名称に関する母親の使用語: 子の月齢による違い. 「島根大学法文学部文学科紀要」, 17, 37-54.
- 村瀬俊樹, 小椋たみ子 & 山下由紀恵 (1998). 育児語の研究 2. 「島根大学法文学部文学科紀要 社会システム学科編」, 2, 79-104.
- 小椋たみ子, 吉本祥江 & 坪田みのり (1997). 母親の育児語と子どもの言語発達、認知発達. 「神戸大学発達科学部研究紀要」, 5, 1-14.
- Ohori, T. (1996). Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology. In: M. Shibatani & S. A. Thompson (Eds.) *Essays on semantics and pragmatics* (pp.201-218). Amsterdam: John Benjamins.
- 荻原千佳子. (2008). 「いいさし発話の解釈理論: 会話目的達成スキーマによる展開」. 横浜: 春風社.
- 大久保愛. (1967). 「幼児言語の発達」. 東京: 東京堂.
- 大久保愛. (1977). 「幼児のことばとおとな」. 東京: 三省堂.
- 大久保愛. (1984). 「幼児言語の研究: 構文と語彙」. 東京: あゆみ出版.
- Oshima-Takane, Y., MacWhinney, B., Sirai, H., Miyata, S., & Naka, N. (Eds.) (1998). *CHILDES for Japanese: Second edition*. The JCHAT Project Nagoya: Chukyo University.
- 大津隆弘. (2013). 「だって」の語用論. 「日本語学」, 32, 100-111.
- Painter, C. (1999). *Learning through language in early childhood*. London: Continuum.
- Shanker, S. G. & Taylor, T. J. (2001). The house that Bruner built. In: D. Bakhurst & S. G. Shanker (Eds.), *Jerome Bruner: Language, culture, self* (pp.50-70). London: Sage Publications.
- 白川博之. (2009). 「『いいさし文』の研究」. 東京: くろしお出版.
- Snow, C. (1995). Issues in the study of input: Fine-tuning, universality, individual and developmental differences, and necessary causes. In: P. Fletcher & B. MacWhinney (Eds.), *Handbook of child language* (pp.180-193). Oxford: Blackwell Publishers.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Yamamoto, T. (2003). A relevance theoretic analysis of the Japanese connectives DAKARA and DATTE. *International Christian University Educational Studies*, 45, 187-193.
- Yamamoto, T., Matsui, T., & McCagg, P. (2005). Use of the connective 'datte' and development of theory of mind. In M. Minami, H. Kobayashi, M. Nakayama, & H. Sirai (Eds.), *Studies in Language Sciences*, 4, (pp.83-98). Tokyo: Kuroshio Publishers.